

高等学校国語「言語文化」における教材としての『伊勢物語』の研究

— 六段を中心に —

井内 健太

一 本稿の目的

二〇二二年度より、高等学校では改訂された『学習指導要領』（平成三〇年告示）が実施され、国語科は従来から大きな変更が生じるものと思われる。科目が再編され、かつての高校一年の共通必修科目であった「国語総合」（四単位）は、「現代の国語」（二単位）と「言語文化」（二単位）とに分けられることとなった。「現代の国語」は、主として論理的な文章や実用的な文章を教材とし、「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の領域が大きい。「言語文化」は、古典から近代以降の文学的な文章を教材とし、「読むこと」の領域を中心とする。『学習指導要領』の改訂にもなつて、どの科目においても実現すべきこととされているのが「主体的・対話的で深い学び」である。特に高等学校における国語教育の現場では講義形式の教員による一方の伝達型授業が行われる傾向が強いこともあり、より積極的な授業改善が求められる。例として、

主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくりだすために、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか^{（注）}

といった観点から授業全体を再構成することが求められるようになった。古典の授業においても、教材の文章を現代

語訳することを到達点とするだけの旧来の授業からの脱却が目指されている。それにとまって、教科書を中心とする教材にも改善の必要がある。

本稿の目的は、新科目「言語文化」において、教材の観点から古典の授業がどのように展開されるのかを考察することにある。「言語文化」の国語教科書を主たる対象として調査を行い、旧来の教科書からの改善点や、その教材を用いることでどのような授業が目指されているかといったことを明らかにしたいと考える。題材として『伊勢物語』を選定した。中古の歌物語である『伊勢物語』は、後世の文学作品にも多大な影響を与え続けた文学史的にも重要な作品であり、比較的平易な文章表現が用いられているため、初学者が古典を学ぶにあたって教材とするのにふさわしい。長らく古典教育の定番教材の一つであった『伊勢物語』が「言語文化」ではどのような教材として扱われるのかを確かめたい。『伊勢物語』は約一二五の章段から成っているが、後述のように教科書に採録されている章段は限られている。その中でも本稿では六段（いわゆる芥川章段）を主に扱うこととした。六段は『伊勢物語』中でも「鬼」による怪異を描いた特殊な章段であり、初学段階の生徒が古典への興味を深めるのに適していると判断したためである。

方法としては、「言語文化」の教科書を網羅的に調査し、「国語総合」教科書との比較、学習課題・学習の手引き・言語活動の検討を行った。ただし、本稿では文法や語法についての学習課題は扱わず、内容理解に関するものを主に取り上げている。言語活動については、科目が「言語文化」になって教科書が大きく変更された点の一つである。『学習指導要領』においても、他の国語科目と同様に「目標」として「言語活動を通して」理解し、表現する資質・能力を育成することが示されている。『学習指導要領』には「書くこと」「読むこと」の言語活動例がいくつか示されているが、これを踏まえて各教科書においても様々な言語活動の提案が見られた。ここでは古典教育の中での「主体的・対話的で深い学び」の実現が目指されているが、『伊勢物語』を教材とすることでどのようにこれを達成できるのか、その可能性についても分析をこころみた。

第一 715…東下り（九段）・筒井筒（二三段）

第一 716…筒井筒（二三段）

桐原 717…芥川（六段*）・東下り（九段）・筒井筒（二三段）・梓弓（二四段）・小野の雪（八三段）

ここにみたように、採録されている章段は、六段（八八%）、九段（七六%）、二三段（九四%）が多く、二四段（四一%）がこれに次ぐ。桐原教科書のみが八三段を採録している。この傾向は「国語総合」と変わらない^{〔注3〕}。いわゆる定番教材が引き続き採用されるという結果になっている。

本文に関しては、六段は、「これは、二条の後の」以下の段末注記を省くものが多く、一三段は、「まれまれ、かの高安に」以下の後半部分を省くものが若干みられた。読解の分量を減らすとともに話を単純化することで、学習の負担を軽減させる意図によるものと思われる。六段の段末注記は二条の后と在原業平との関係を暗示するもので、文学史・享受史的にも重要な記述であり、このように物語の本文を削除してしまうことにはかねてより批判もあった^{〔注4〕}。また、大修館706では、九段・二三段において、本文を中略し、その内容を現代語訳に近い形で要約して示すという工夫がなされている。授業時間との兼ね合いの中でこのような処理を取り入れることもある程度必要であろう。次節以降では六段を対象に、「言語文化」教科書を具体的に分析する。

三 「芥川」章段の検討

（1）学習課題

前節でみたように、六段は「言語文化」教科書においても採録率の高い章段となっている。「男」が「女」を盗み出して逃げた果てに「女」が「鬼」に食われてしまうという悲劇的結末を迎え、最後に「白玉か」の歌が余韻を添えるという展開は、適度に短い文章の中にドラマ性や怪奇要素が盛り込まれており、生徒の興味を惹起するのにふさわ

しい教材であるといえよう。また、多くの教科書が省いているけれども、後半の段末注記部分は、在原業平と二条の后との禁じられた恋の物語という、『伊勢物語』の他の章段にも関わる内容を理解するのに役立つ。その教材としての重要性から、六段は多くの教材研究・授業実践報告がなされてきた^(注5)。また、文学研究においては様々な問題が提起されている。代表的なものでは、「芥川」の位置はどこか、「白玉か……」の歌は本来物語とは無関係のものだったか否か、段末注記ほどの段階で書かれたものか、といったものである^(注6)。本稿では、これらの問題に新しい知見を加えたり、従来の解釈を刷新したりするのではなく、教育の現場でどのように読まれ、教材としてどのような意義を持つかを検討したい。

ここではまず「言語文化」教科書における学習課題をみてゆくこととする。以下の二つの課題がほとんどの教科書に見られたものである。一つは「女」の人物像や身分・境遇について考えさせるものである。もう一つは「白玉か」の和歌に込められた「男」の心情を考えさせるものである。これらは旧来の教科書にもあった学習課題を踏襲している。

『伊勢物語』は物語の背景や状況設定を詳細に描かないという性格を持っているが、六段についても説明がかなり不足しており、「女」に関する情報は段末注記を除いてほとんどない。一つ目の課題から、「女」の人物像について考えることで、「男」と「女」の関係性、身分差を推測することにつながる。この課題では多くの教科書が「女」の発言である「かれは何ぞ」^(注7)という本文の表現を手がかりとすることを指示している。「草の上に置きたりける露」を見て、「露」だとわからない、または「露」そのものを知らないほどの深窓の令嬢であることを示すことに思い至らせ、「女のえ得まじかりけるを」と合わせて「女」が高貴な身分であることを読み取らせる狙いである。「女」がいかに高貴な身分であったとしても、露を知らないとは考えにくく、『新潮日本古典集成』は「いと暗き」夜だから、何か僅かに光るもの、と見えた」ために尋ねたのだとする。多少の強引さはあるが、邸の中で大事に育てられた「女」が草の生い茂る夜道に慣れていない様子は生徒にも想像できるだろう。「言語文化」において、『学習指導要領』〔知識・技能〕の指導事項には「文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解すること」が掲げられている。文章を読む

際、個々の語句が示す意味だけでは読み取れない情報がその文章の背後にある文脈と合わせることで見えてくることがある。ここで「かれは何ぞ」の一行から「女」の様子を想像する読みは重要であると考える。ただし、このような読みは「女」が高貴な人物であるという文脈が前提となるのであって、そのような文脈を踏まえることなしに闇雲に想像を働かせるのは合理性を欠くのではないだろうか。そういった意味でも「女」が二条の後であることを示す段落注記の内容を生徒に把握させることは必要であろう。

もう一つの課題は物語の核となる和歌について考えるものである。「本文全体（の内容）を踏まえて」（東書701・東書702・第一713・第一714）、「露の語に注意して」（三省堂703）といった指示を含む課題があるように、歌を単独で解釈するだけでなく、散文部分と歌の表現を結びつけて歌を読み解くことが要求される。これは歌物語や歌の用いられるその他の物語的文章、日記作品等を読むにあたって重要となる読解の能力を身につけることにつながると思われる。

その他の課題は、以下のようなものがある。一つは、挿絵として掲載された伊勢絵を利用したものである。画中の「男」の姿が本文のどの場面と対応しているかを考えさせる学習課題があった（東書701・大修館705・大修館706）。また、課題とは別に設けられた脚間においても挿絵と本文の描写との違いを見つけさせるもの（数研707）、挿絵に描かれた三つの場面に従って本文の区切りを考えるもの（数研709）があった。このように絵画資料を学習の補助として用いたものは言語活動においても見られたが、これについては後述する。別の課題には、散文部分における「男」の行動や心情を考える、または整理するもの（三省堂703・三省堂704・数研707・数研708・数研709・第一713・第一714）、男の行動を中心に話をまとめるもの（筑摩712）等があった。

このように、「男」についてはその行動や心情について考える課題がある一方で、「女」に関しては「身分」や「暮らし」に着目させる課題がほとんどである。当該章段には「女」の心情は物語中で明確に描かれていないため、本文の表現に基づいて内容を理解するのが読解の基本である以上当然のことであるのだが、「男」との逃避行が「女」の同意によるものなのか否かという問題が見えづらくなっている。立石和弘氏は、「女」には同意の意志もなく、「男」

の「盗み」は一方的な「拉致」であるとし、当該章段が「男」の純愛を描いたロマンティックな物語として享受されてきた歴史の中でこの物語が持つ暴力性が隠蔽されてきたと指摘する^(注8)。

当該章段を男女の相思相愛の物語として読む余地は残されており^(注9)、「かれは何ぞ」という女の発言に男に対して心を許す女の姿をみることもできそうである^(注10)。しかし、一方で立石氏の指摘も重要であり、この物語が男性による女性の心情を無視した一方的な愛情表現を美化し、男性の持つ加害性を肯定するという価値観を助長しかねないという危険性を孕む点^(注11)に教育者は自覚的であるべきだろう。吉野誠氏の授業実践報告^(注12)では、このような問題を踏まえて、当該章段において「女」の心情を生徒に考えさせることで、必ずしも「女」の合意が存在しているとは限らないという点に気づかせる。さらに女性の合意の重要性をめぐって、古典世界と現代における男女の関係をめぐる価値観の相違や性愛関係における男性の在り方にまで議論を深めることができるとしている。ジェンダー議論の中にかつての男性性をめぐる価値観が批判的に見直されている昨今、『伊勢物語』の教材としての可能性を新たに示すものであろう。

(2) 言語活動

次に、言語活動をみてゆきたい。ここは前述のように「言語文化」教科書において大きく刷新された部分であり、多くの教科書が内容を充実させている。主な活動を分類したものが以下である。

- ① 絵画資料を用いた活動……三省堂 704・第一 713・第一 714
 - ② 段末注記に注目した活動……数研 707・明治 711
 - ③ 比べ読みの活動……数研 708
 - ④ 創作活動……数研 709・桐原 717
- ①は、学習課題の一部にも見られた、歴史的絵画資料を用いて物語の本文との対応関係を考えたり、相違点を見出

したりするものである。三省堂⁷⁰⁴では、奈良絵本『伊勢物語』（鉄心斎文庫所蔵）が用いられている。「女」を背負った「男」が川辺ににいるという伊勢絵でよく用いられた構図である。二人の視線は柳の木に向けられている。活動の内容は、「どんな場面を描いているか、和歌の内容を踏まえて、話し合おう」というものであり、散文部分と和歌との対応関係に着目させるのが狙いのようである。ここでの絵画資料は視覚情報によって生徒の理解を補助するものとして役立てられている。

一方、第一713・第一714には『異本伊勢物語絵巻』（東京国立博物館所蔵。鎌倉時代の絵巻を近世に狩野養信らが模写したものとされる）と物語本文とを比較して気づいたことを発表し合うという活動がある。この絵巻は、「女」を背負って川の側を進む「男」、落雷の中「女」のいる建物の前に弓箭を持って立つ「男」、「鬼」に捕らえられた女を見て足ずりをして泣く「男」という三つの場面を描いた「異時同図」の手法を用いたものである。他の教科書も多くがこれを掲載しており、学習の課題でも多く用いられていることは先述した。この絵巻は、「女」が「男」の眼前で食われているなど、物語の描写と細部において異なる箇所が見られる。第一713・第一714は、「後代の解釈に基づいて描かれたものである」としており、絵巻の世界が絵師たちの解釈によって作られたものであることを示している。物語の解釈は歴史とともに変遷するものであること、そして『伊勢物語』が後代どのように解釈され、文化の中に取り込まれてきたかという享受の在り方について理解することは、自国の伝統文化に対する関心をより深めることにつながる^{（注13）}。また、桐原⁷¹⁷はコラムで「鬼」について解説しており、中古では「鬼」は人の目に見えない存在だった^{（注14）}ものが、時代が下るにつれて鬼の姿が可視化されるのだとして、『異本伊勢物語絵巻』の「鬼一口」の場面に例を挙げている。「鬼」の文化史研究^{（注15）}を取り入れたものであるが、現代人のイメージする「鬼」が元来は別のものであり、歴史の流れの中で形成されたものであることを伝えている。我が国の伝統と文化に興味を抱かせる教材の好例ではないだろうか。

②は、段末注記に注目させたもので、数研⁷⁰⁷は前半部分との関係について、そして段末注記があることで章段全体

の読みがどのように変わるかについて話し合う活動、明治71は段末注記があることよってどのような効果があるかについて話し合う活動を示している。大修館705は同内容の問いを学習の課題で提示しているが、これらは「国語総合」教科書でも学習の課題であった問いを協働的な学びの活動に転用したものである。

当該章段の段末注記は、後世の手によるものとする後人注記説と成立当初よりあったものとする説とが古来より対立している。現代の注釈書で後人注記説をとるものは少なく^(注16)、近年において後人注記説は斥けられつつあるようである。しかし、数研707は「後人の付け加えた注記だと言われている」として、後人注記であることを前提に活動を指示している。段末注記を本文に持つ三省堂703も参考資料として俵万智『恋する伊勢物語』^(注17)を引用して後人注記説を紹介している。後半部は後人の注であるとした方が前半部と食い違っていることについて諒解されやすいという教育的配慮もあるのかもしれない。後人注記説の当否はともかく、教育の場面において、このような説明は、生徒に対して前半部が主であり、後半部は従であるという先入観を与える懸念があると考えられる。それ自体で十分に鑑賞できる怪異譚に後世の人間が余計な合理的説明を取って付けたかのような印象を抱きかねないのである。このような理解は必ずしも誤りではないものの、特定の意見に収斂されることで教材の可能性が損なわれる。虚と実を曖昧にするところに『伊勢物語』の方法があるとする捉え方^(注18)も存し、そのような理解によつて文学史的に重要な近松門左衛門の虚実皮膜論に接続することもできるであろう。生徒の話し合い活動においては、先入観を抱かせないことで後人注記の可能性も含めて、多様なものの見方・考え方の交流が期待できるのではないだろうか。

③は、当該章段の類話である、『今昔物語集』巻二十七第七「在原業平中将女、被^{おぼ}暎^ぼ鬼語」を参考資料として用い、読み比べをする活動である。これは、『学習指導要領』において「言語文化」の「読むこと」の言語活動例として示された「異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動」と対応するものである。時代の異なる古典作品を比較してそれぞれの作品の共通点と相違点を発見することで、読解を深めると同時に、時代の変遷による表現・文体・主題の差異や継承について理解することができる。芥川龍之介『羅

「生門」と『今昔物語集』巻二十九第十八「羅城門登上層見死人盗人語」との比べ読みなどは定番の題材であるが、比較的対象は近現代の作品を用いることもできる。言語文化が現代にまで受け継がれてきたことを知ることは、古典の価値を認識し、生涯にわたって古典に親しむ態度を育むことにつながる。すでに古典の授業においても、「比べ読み」を取り入れたすぐれた授業実践、授業提案が多数提出されている^{〔注19〕}。複数の教材を用いた授業は、教師・生徒双方にとって負担が大きいため一部の教育現場でしか実施されてこなかったと思われるが、「言語文化」教科書で言語活動として提示されることで、より身近なものとなっていくのではないだろうか。ただし、授業の際には、現代語訳や解説を活用するなどして生徒の負担を減らす工夫が求められるであろう。

以下、具体的に当該章段における比べ読み活動について検討してゆきたい。数研708では、「三つの場面に分けて、登場人物の行動や心情がどのように描かれているか、違いを整理」する活動と、それを踏まえて両者の「表現の特徴について話し合い、考えたことをまとめ」る活動が提示されている。細部の描写の相違点の確認から、文章全体を通して表現の特徴を把握するという流れである。ここでは、二つの作品を比較した際、『今昔物語集』には『伊勢物語』にはない具体性、怪異性、説教性を持っていることを順に確認してゆきたい。

一読して明らかのように、内容は同じであるが、『今昔』は『伊勢』よりも詳しく具体的な説明をしている。『伊勢』において「男」としか説明されない人物について、『今昔』では「右近の中将在原の業平」^{〔注20〕}という固有名詞が明かされ、「いみじき世の色好みにて、世にある女のかたちうるはしと聞くをば、宮仕へ人をも人の娘をも見残すなく、数を尽くして見むと思ひける」と、手に入れた女を得るためには禁忌を犯すことも辞さない好色性が明かされる。『伊勢物語』や在原業平にまつわる伝承を踏まえた記述である。現代の小説などの物語に慣れ親しんでいる生徒には『今昔』の描写の方が自然なものと感じるかもしれない。『今昔』と比較することで、細部の描写を省いた『伊勢』の語りの特殊性が浮かび上がる。また、『今昔』では「男」が「女」との結婚を許されない事情について、「「やむごとく」なからむ婿取りをせむ。」と言ひて、親どもの、めでたくかしづきければ」としており、身分違いの結婚が「女」の

親に認められなかったことを示唆している。数研708はコラムとして「平安時代の婚姻形態」を掲載しており、『今昔』の記述の背景となる当時の招婿婚のあり方について解説を加えている。『今昔』の詳細な記事によって当時の風習・歴史的背景がより理解しやすくなっている。

『伊勢』の前半部では、「男」が「女」を隠した蔵が「鬼ある所」であり、「女」が消えたのは「鬼はや一口に食ひてけり」と、「鬼」の仕業であることを明確に述べる。一方、『今昔』では、業平が目を離れた間に、「女」は「頭の限り」と、着たりける衣どもとばかり残して消失してしまっている。「倉に住みける鬼のしけるにやありけむ」とあって、「鬼」の仕業であることが想像されるも、確証を持った語りではない。「女」を消したものの正体を曖昧にすることで、説話の怪異性が強まっている。また、「女」の頭部だけが残っていたという残酷な描写もあり、『伊勢』にはない恐怖を読者に与える。対照的に、『伊勢』は怪異性を弱めることで、物語の持つ悲恋の主題がよりはっきりしている。このように、同じ出来事や事件を語っていても、語りの力点をどこに置くのかによって読者の印象は異なる。比べ読み活動を通して、このように物事を多面的・多角的に捉える視座を生徒は獲得できるようになるのではないだろうか。その点、数研708の『伊勢』本文が段末注記を欠いているのは残念なことと思われる。段末注記の持つ現実性・史実性があればこそ、『今昔』との対比もより明確になるからである。

さらに重要な相違点として『今昔』が「白玉か」の和歌を載せていないことがある。代わって末尾には「案内知らざらむ所には、ゆめゆめ立ち寄るまじきなり。いはむや、宿りせむことは思ひかくべからず」とあり、よく知らない場所には立ち寄りたり、宿泊したりするべきでないという教訓を垂れる。悲惨な内容に比して重々しさに欠ける教訓である印象を受けるが、世俗説話においてその段末に教訓を述べること自体が重要なのであろう。それに対して『伊勢』の主眼は歌を語ることにある。散文部分の展開や表現は一首の歌へと収斂していくのである。このように、当該章段の比べ読み活動を通じて、歌物語と説話という二つのジャンルの本質的な違いを理解する一助となりうる。『伊勢』は九段もまた『今昔』巻二十四第三十五にも類話が見られるが、こちらは『伊勢』の歌が採られているなど比較で

きる点に乏しく、比べ読み教材としての学習効果は低いであろう。

④は、「白玉か……」の歌を「現代語の短歌」に作り換えたり（数研709）、歌に込められた「男」の心情を「口語自由詩」で表現したりする（桐原71）活動である。これは、『学習指導要領』の「読むこと（言語文化）」の指導事項にある「和歌や俳句などを読み、書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり、テーマを立ててまとめたりする活動」に一部対応するものようである。同『解説』では以下のように述べられている。

和歌や俳句などのいわゆる短詩型の作品は、情報量が比較的限られるため、読み手によって解釈の幅は多様なものとなることが想定される。他の文体や形式の文章に書き換えたり外国語に訳したりすることは、そうした読み手の多様な解釈を顕在化させることになり、解釈の違いについて話し合うには効果的である。

ここで述べられているように、「読むこと」の指導における和歌の作り換え活動は、生徒の解釈を言語化することとその主眼が置かれている。また、そこで期待されているのは多様な読みの交流であり、協働的な学習を取り入れることも重要となる。

この歌の解釈の多様性を検討した際、注釈書のレベルでは解釈の揺れはさほど見られないが、「露と答へて消えなましものを」の箇所は複数の解釈の余地を残している。ここで「男」は「女」に「かれは何ぞ」と問われた時点を見直し、反実仮想の「まし」を用いて、現実には実現できなかったことを願う。「男」が実現できなかったこととは、「女」の問いかけに「露」だと答えられなかったことであり、「露」のように消え去ることができなかったことである。では、「男」の願いは「消え去る」ことだけなのか、「女の問いかけに応じる」ことも含むものだろうか。いずれの解釈も可能であるが、後者の方がより「男」の後悔が深まり、悲劇性が増す。「女」に一言「露」と言ってやるだけのこともできなかったという「男」の嘆きの言葉となるからである。そのように考えると、「女」の問いかけを受けた時、返事をする余裕もなく^{〔注21〕}先を急ぐ「男」の姿が想像される^{〔注22〕}。和歌の解釈の相違は物語全体について

の読みの交流へと発展しうるのである。

当該章段を歌物語や現代の物語に翻案する活動は既に提案されており、実践報告がなされている^(注23)が、短歌・詩の創作活動を取り入れた授業も有意義であるように思われる。なお、授業の実施にあたっては、俵万智氏による現代語短歌への作り換え^(注24)や川上弘美氏による口語自由詩への作り換え^(注25)が参考になる。

四 結語

これからの高等学校国語の授業において、教材に依存した授業からの脱却が目指されている。「教材ありき」の発想から「育成を目指す資質・能力ありき」の発想への転換^(注26)が求められ、教材を教える事を目的とするのではなく、いかなる資質・能力を涵養できるかという観点から授業を構想することが重要となる。かつての定番教材もその教材としての価値を自明とするのではなく、目標とする資質・能力の育成に資するものであるか、言語活動をどのように行えるかといった点が精査されなければならない。また、古典教育における課題として生徒の学習意欲が高まらない傾向にあることが常に指摘されている。古典に興味を持たせる工夫は様々にされているが、それは生徒の浅薄な興味を喚起するものではなく、知的好奇心に訴え、自ら主体的に学ぶよう導く授業が目指されなければならない。そのような授業のための古典教材の在り方が模索されるのである。

本稿では、新科目「言語文化」の中で『伊勢物語』の六段が教材としてどのように用いられるかを見てきた。現行の教科書では様々な学習課題や言語活動が示されており、それらを通して伝統的な言語文化への理解を深め、言葉による見方・考え方を育むとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現が目指されている。そこで示された学習の内容は、すでに一部で授業実践されたものがほとんどであったが、教科書で提示されたことの意義は大きい。

『伊勢物語』は登場人物の心情や背景となる状況を詳細に語らない余白の大きいテキストであり、読み手の想像を

働かせた多様な読みが生まれる可能性を持っている。そのため、一つの答えに定まるのではなく、学習者相互の読みを交流させる協働的な学習に適している。また、後の文学作品に与えた影響が大きく、これを取り入れた作品も多いことから、複数教材による比べ読み活動にも用いることができる^(注27)。さらに、文学だけでなく美術や芸能にも取り入れられており、享受の在り方を知ることでも我が国の伝統文化に関する理解を深めることにもつながる。こうした教材としての特性を理解した上でより効果的な『伊勢物語』の教材としての利用法を磨いていくことが肝要である。

〔注〕

- 1 『高等学校学習指導要領(平成三〇年告示) 解説 国語編』(文部科学省) 第三章
- 2 調査に用いた教科書の一覧は以下の通りである。東書701『新編言語文化』(東京書籍)、東書702『精選言語文化』(同)、三省堂703『精選 言語文化』(三省堂、三省堂704『新 言語文化』(同)、大修館書店)、大修館705『言語文化』(大修館書店)、大修館706『新編 言語文化』(同)、数研707『言語文化』(数研出版)、数研708『高等学校 言語文化』(同)、数研709『新編 言語文化』(同)、文英堂710『言語文化』(文英堂、明治711『精選 言語文化』(明治書院、筑摩712『言語文化』(筑摩書房、第一713『高等学校 言語文化』(第一学習社)、第一714『高等学校 精選言語文化』(同)、第一715『高等学校 標準言語文化』(同)、第一716『高等学校 新編言語文化』(同)、桐原717『探求 言語文化』(桐原書店)、『高等学校教科書目録(令和五年度使用)』(文部科学省)により、教科書の記号・番号を記している。なお、本稿では教科書の略号としてこれを用いる。
- 3 『国語総合』教科書における『伊勢物語』の採録状況は、日高愛子「芥川小考——教材としていかに古典を伝えるか——」(『佐賀大学文化教育学部研究論文集』一九卷二号・二〇一五・二)、西一夫・鎌倉大和「教材として『伊勢物語』を読む——『芥川』(第6段)の表現分析——」(『人文科教育研究』四四号・二〇一七・二二)がまとめている。
- 4 末澤明子「『伊勢物語』の贈答歌・付・高等学校古典教材としての扱い」(『福岡女学院大学紀要・人文学部編』二八号・二〇一八・二二)に近年までの諸論についての整理がある。
- 5 教材研究として、室城秀之「伊勢物語『芥川』(六段)——教材論として」(前田雅之・小嶋菜温子・田中実・須貝千里編『新しい作品論』へ)、〈新しい教材論』へ)——古典編 右文書院・二〇〇三、前掲注3 西一夫・鎌倉大和論文など。授業実践報告として、近時では、吉野誠「伊勢物語」第六段「芥川」の古典教材としての現在の意義——本文との往還・盗まれる女——」(河添房江編『アクティブ・ラーニング時代の古典教育』小・中・高・大の授業づくり』東京学芸大学出版会・二〇一八)など。

- 16。15 14 13 12 11 10 9 8 7 6
- 竹岡正夫『伊勢物語全評釈 古注釈十一種集成』(石文書院・一九八七)に代表的な諸説の整理がある。また、前掲注5室城論文参照。
- 本稿で引用した『伊勢物語』の本文は、秋山虔校注『新日本古典文学大系』(岩波書店・一九九七)によるが、適宜教科書の表記に合わせて。
- 立石和弘『男が女を盗む話』(中央公論新社・二〇〇八)
- 『物語本文について、通行の藤原定家天福二年書写本やその系統は「からうしてぬすみいでて」とあるところが、阿波国文庫本・歴博本に「からうしてをんなころ(を)あはせてぬすみいでて」とあり、伝民部卿筆本(いわゆる塗籠本)では「からうしてをんなのころあはせてぬすみていでにけり」とある。「女」が「心あはせ」たこと、つまり相思相愛であったとすることが、これを傍証として用いることができるかもしれない。竹村信治『伊勢物語「芥川」段小考』(『国語教育研究』四八号・二〇〇七・三)は「女(の)ころ(を)あはせて」とある本文が本来のものであるとする。
- この見解をとる例として早稲田久稻の会編『学びを深めるヒントシリーズ 伊勢物語』(明治書院・二〇一八)所収の宮谷聡美氏執筆の第六段の鑑賞。また、宮谷氏は「芥川——「白玉か」の歌をめぐって——」(『歌物語史から見た伊勢物語』新典社・二〇二二)においても、「女」の発言を「コミュニケーションを求める」ものとする。
- 井浪真吾『国語教育誌の中の〈古典〉——国語教室で創られる〈古典〉』(『古典教育と古典文学研究を架橋する 国語科教員の古文教材化の手順』文学通信・二〇二〇)は当該章段を「男性に都合の良い女性掠奪の話をういたテキスト」とし、それが自覚されていないことに警鐘を鳴らす。
- 前掲注5吉野論文
- さらに発展的学習として、同じ場面を描いた複数の伊勢絵を比較するという言語活動も考えられる。教科書に掲載されている『異本伊勢物語絵巻』、奈良絵本『伊勢物語』、『伊勢物語図色紙』(大和文華館所蔵。伝俵屋宗達筆)を比較するだけでも「芥川」の場面において、「男」が杵を履いているか否か、「男」と「女」が互いを見つめ合っているか、ともに「露」を見ているか等の違いが見出せる(前掲注8立石書参照)。ここにはそれぞれの絵師たちによる解釈の相違や解釈の歴史の変遷が反映されていると考えられる。また、近時では窪田祐樹氏が伊勢絵を取り入れた授業の提案、教材研究の一連を発表している。東書702においても、九段について三種の東下りの場面を描いた絵を比較し、本文との違いを発見する言語活動がある。
- 『箋注倭名類聚抄』の「人神」の項に「和名於爾、或説云、隱而不欲顯形、故以称也」とあるのを根拠とする。「隠(オン)」を「鬼(オニ)」の語源とする説は『日本国語大辞典』(小学館)等も採用している。
- 田中貴子『百鬼夜行の見える都市』(一九九四、新曜社)等参照。
- 渡辺実校注『新潮日本古典集成』(新潮社・一九七六)は後人の注であることを明記するが、福井貞助校注・訳『新編日本古典文学全集』(小学館・一九九四)、前掲注7『新日本古典文学大系』、片桐洋一『伊勢物語全読解』(和泉書院・二〇一三)では

- そのような記述はない。また、鈴木日出男『伊勢物語評解』（筑摩書房・二〇一三）は「語り手の言辞」、大井田晴彦校注『伊勢物語 現代語訳付・索引付』（三弥生書店・二〇一九）は「必ずしも後の人の注記とも思われぬ」とする。筑摩書房・一九九五。このエッセイは『伊勢物語』に興味を抱いた生徒が読書活動に用いるのに適したテキストの一つであり、教科書のコラム等にも用いられている（数研709等）。
- 山本登朗「段末注記という方法——伊勢物語と毛詩——」（『伊勢物語の生成と展開』笠間書院・二〇一七）等。
- 19 18 17
新科目「言語文化」を意識したもので例を挙げると、古屋明子「有名古典の言語活動」「言語文化」「古典探究」における実践例」（『明治書院・二〇二二』）では「竹取物語」と竹取説話との比較、大元理絵「言語文化」読むこと（古典）（大滝一登・高木展郎編『新学習指導要領対応 高校の国語授業はこう変わる』三省堂・二〇一八）では複数の時代にわたって成立した浦島太郎説話の比較を取り入れた授業を紹介している。
- 20
以下、『今昔物語集』の本文は森正人校注『新日本古典文学大系』第五卷（岩波書店・一九九六）を参照しながら、数研708に掲載された校訂本文に従った。ただし、数研708は出典を明らかにしていない。
- 21 22
前掲注6竹岡書の「評」は夜道に光る「露」に「男」も驚き、返事もできなかったとする。
- 23
三省堂704の学習課題には「女に「かれは何ぞ」と問いかけられ、男はどういう行動をとったか」という問いがある。このような想像も期待するものであろう。
- 24
田山路範幸「『伊勢物語』芥川の書き換えから見えてきたこと」（全国大学国語教育学会第一四二回東京大会自由研究発表・二〇二一・五）等。
- 25
『21世紀版・少年少女古典文学館 第二巻 竹取物語・伊勢物語』（講談社・二〇〇九）では、『伊勢物語』作中歌が現代短歌に訳されている。また、前掲注17俵書も参考にできる。
- 26
『池澤夏樹』個人編集日本文学全集 第三巻 竹取物語・伊勢物語・堤中納言物語・土左日記・更級日記」（河出書房新社・二〇一六）では、『伊勢物語』作中歌が口語自由詩に訳されている。
- 27
大滝一登「高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 理論編」（『明治書院・二〇一八』）
本稿で取り上げた六段だけでなく、二三段と『大和物語』一四九段（沖つ白波）との比べ読みを言語活動に据えた教科書がある（明治711・第一713・第一714）。

〔付記〕

本研究はJSPS科研費 JP20K13986の助成を受けたものです。